北菱電興の二刀流ビジネス

独自開発とマッチング戦略

建設業界の省人・省力化へ

「少しだけ先を行く」

北菱電興（金沢市、小倉一郎代表取締役社長）は16日から18日まで、石川県産業展示館3号館で開催された石川県鉄工機電協会の第60回機械工業見本市「ＭＥＸ金沢２０２４」で、２企業のＩＣＴ技術活用による建設業界の省人・省力化、働き方改革に貢献できるソリューションを紹介し、来場者は各ツールの説明に聞き入っていた。

「ＭＥＸ金沢2024」での出展ブース＝石川県産業展示館

位置情報を起点とした現場情報の集約・分析プラットホームとなるマルティスープ（東京）の「ｉＦｉｅｌｄ（アイ・フィールド）」は、屋内・屋外を問わず、現場の状況をはじめ、人やモノを管理・分析できることがメリット。工事現場では未だ電話が確認作業に占める部分が大きいが、同社のセンサーやデバイスを活用した位置情報サービスと連携することで、移動中のトラックの位置やフォークリフトの稼働状況などを見える化し、現場の詳細な状況を把握することができ、人やモノの最適化を図ることが可能になる。

人口減という社会的要因の影響や２０２４年問題などで建設業界は人手不足が深刻化しており、省力化、生産性向上は喫緊の課題。北菱電興ではこうしたＩＣＴソリューションを活用することで建設業に貢献できるとしている。

一方、システム・ケイ（北海道）のネットワークカメラ映像システム「ＳＫ ＶＭＳ」の活用により、工事現場における安全性や適正化を実現できるという。

このシステムは９９３メーカー、約１万９０００機種のネットワークカメラに対応できる汎用性があり、カメラ映像の長期・高解像度の保管、ＡＩ画像解析・業務システムとの連動が可能で利便性が高い。

ネットワークカメラを活用した映像システム

例えば、工事現場で録画と信号を組み合わせ、センサーを紐付けすれば、画像の検索も可能で、現場の人員配置から資機材の状況管理といった詳細なデータを記録保存できるとしている。

様々な事業部の存在が強み

北菱電興の亀田充取締役機器事業部長は「当社は各種プログラムやツールを独自に開発することも可能だが、時代の激しい変化に対応すべく、既に市場にあるものを有機的に繋げ、より良いサービスを生み出し、かつスピード感をもって提供することが重要と考えている」と述べ、「社内に多くの事業部がある強みを生かし、新しい技術開発を想定しながら、企業と企業をマッチングさせ、建設現場や製造工場を最適化していきたい。遠い未来を展望するのではなく、少しだけ先をいくスタイルの追求が北陸に根づいた企業の使命と捉えている」と語る。

©「日刊　建設工業新聞」　発行所　（株）北陸工業新聞社（本社：石川県金沢市）